

2-6. 呉市

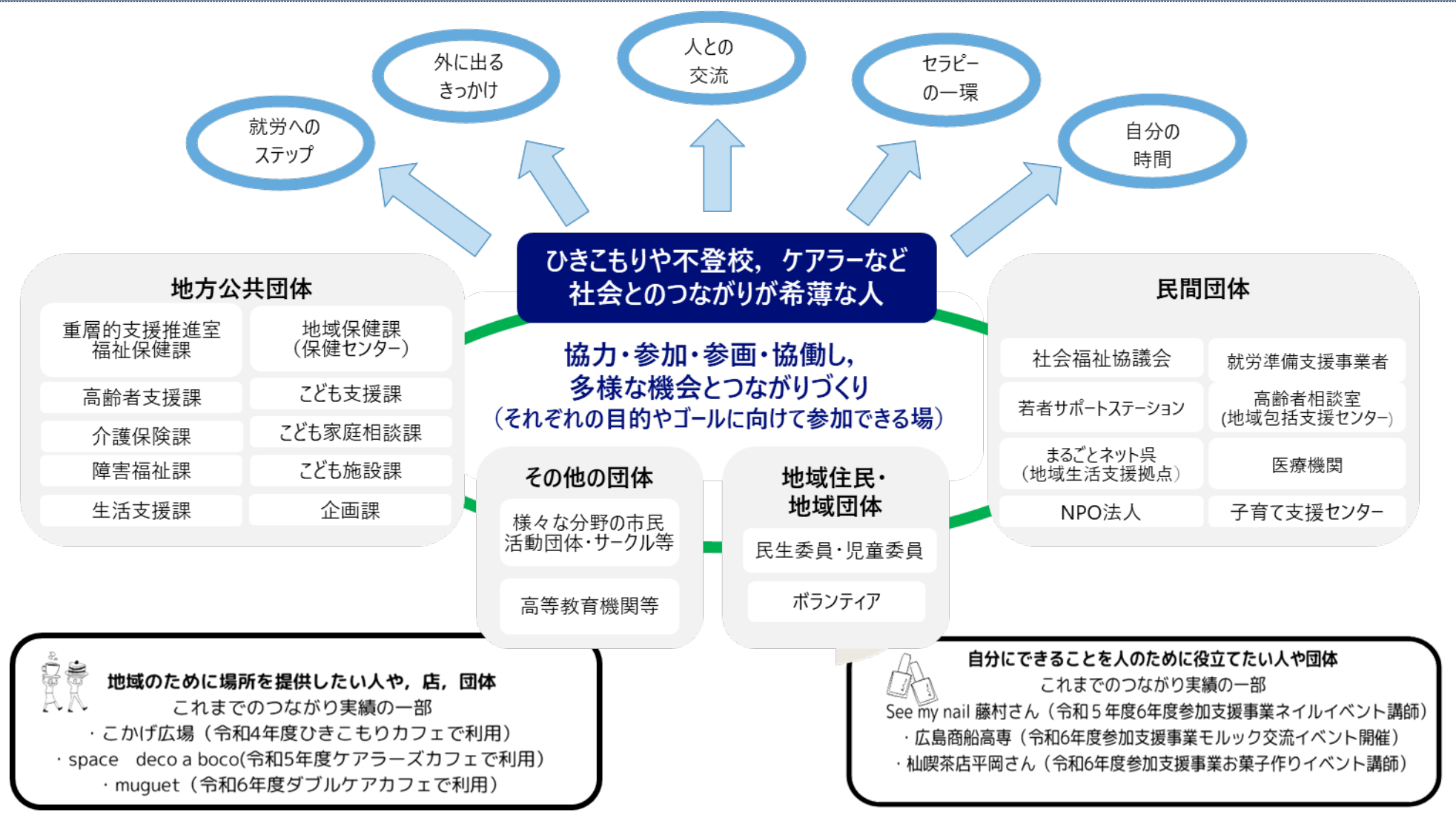
No.	6	呉市
-----	---	----

1. 取組の全体像					
1. 自治体の概要					
①	自治体名	呉市		②	担当部局名 福祉保健課 重層的支援推進室
③	人口	203, 549(人)＜令和 6 年 3 月31日時点＞			
④	自治体内連携	庁内連携部局(メイン)		重層的支援推進室(福祉保健課)	
			庁内連携内 ※会議体、情報共有	・庁内関係部署との横断的な連携体制の構築 庁外関係機関との連絡調整	
		庁内連携部局(メンバー)		高齢者支援課・介護保険課・障害福祉課・生活支援課・地域保健課(保健センター)・こども支援課 こども家庭相談課・こども施設課・企画課	
			庁内連携内容 ※会議体、情報共有	・必要に応じて、事業内容の展開を検討 関係機関との連絡調整	
2. 形成をめざす地方版連携 PF の姿					
①	従前の取組 ※重層の取組、外部組織連携、地域コミュニティ形成等	・ 令和 4 年度から重層的支援推進室を設置し、重層的支援体制整備事業として、属性を問わない相談支援, 参加支援, 地域づくりを実施。その中で、世代・分野を超えて各事業で協働できそうなこと、また、共通の課題等について、庁内福祉関係各課と呉市社会福祉協議会で、ワーキングを行った。			
②	実現したい状態 ※構築する仕組み/支援対象の住民を取り巻く環境	今年度のゴール		・ PF メンバーがお互いの取組や事業を把握し、現在感じている課題を共有する。 ・ 福祉分野だけでなく、福祉以外の機関とも連携できる体制を整える。	
		最終的なゴール		・ PF が孤独・孤立対策の継続的な協議の場として機能する。 ・ 支援機関同士の関係性が深化し、連携の強化が図られ、支援の幅が広がり、新たな支援策を創出する。	

3. 地方版連携 PF における連携体制			
①	地方版連携 PF (種類があれば)	立ち上げ年度	令和7年度(予定)
		参画メンバー	行政, 社協, NPO 法人, 精神科・心療内科クリニック(医療機関), 市民活動団体, 高等教育機関等
		選出・打診時の工夫	目指している取組に連携不可欠な団体
②	地域協議会 ※特に専門性の高い支援を行う団体等で構成	立ち上げ年度	令和7年度(予定)
		参画メンバー	—
		選出・打診時の工夫	—
4. PF 連携による価値や工夫_考え方			
・ 社会とのつながりが希薄な方(生きづらさを抱えている方)とつながっている団体等と連携することで, 社会とつながるための支援策(社会資源の創出, マッチングなど)の幅が広がり, また, 支援につながる可能性も高くなる。 ・ PF を形成することで, 現在困難さを抱えている方だけでなく, 全ての方を対象として, 孤独を予防するという観点での取組も推進できる。			

2. 連携 PF イメージ

5. 連携PFのイメージ図



3. 試行的事業一覧					
6. 本年度に取り組む試行的事業の概要					
試行的事業の ポイント・工夫		・ 実態調査を行い、その調査結果にもとづいて今後目指すべき孤独・孤立対策の方向性や支援メニューの組み立てを行う。 ・ 市民に対する普及啓発を図りながら、当事者に寄り添う各種イベントを設計する。			
	事業名称	事業内容	目的/期待効果・KPI	実施時期	発注先
①	実態調査	【調査対象及び調査対象者数】 ・ 満 18 歳以上の個人 3,000 名 【調査実施期間】 ・ 令和 6 年 9 月 27 日(金)～令和 6 年 10 月 31 日(木) 【調査事項】 孤独に関する事項、孤立に関する事項、居場所に関する事項、属性事項 【調査方法】 ・ 郵送により調査票を送付、郵送またはインターネット回答による回収 【回収率】 ・ 有効回答 1,198 件（有効回答率:39.9%）	・ 性年代毎の特徴を把握 ・ 市民が求める居場所のイメージについて把握	10 月～11 月	株式会社 ウェルウェル(約 190 万円)
			成果 検証 結果 ✓ 呉市では、若者と比較して中高年の孤独感が強く表れている。 ✓ 安心できる居場所が「ない」と回答した人ほど、孤独感を感じやすく、また孤立する傾向も高い。		
②	講演会	・ 孤独・孤立問題の市民への普及啓発・支援の機運醸成を目的として、絵本の朗読、パネルディスカッションで構成する講演会を開催した。 ・ パネルディスカッションには、内閣府大西参与、臨床心理士、地域のコミュニティ形成に関する実践者、地元の大学生が登壇した。	・ 市民に孤独・孤立という社会課題に関心をもってもらうこと	10 月 20 日(日)	講師謝金、手話通訳・司会など (約 30 万円)
			成果 検証 結果 ✓ 参加者 100 名 ✓ 講演会の満足度として、「大変良い」「良い」を選んだ人が 85%以上。 ✓ 講演会に参加する前後で「人と人とのつながりへの意識が「変わった」と答えた人が 60%以上。		
③	パネル展	・ 市民や支援機関に対して、「孤独・孤立」は誰でも起こりえる問題であることの周知を図り、孤独・孤立に悩む人が状況に応じ、相談や支援を受けることができる「相互に支えあい、人と人との「つながり」が生まれる社会」の実現を目指すべく、ケアラーやひきこもりの家族、LGBTQ の方に孤独を感じた体験や「つながること」についてインタビューし、それをまとめたエッセイを展示するパネル展を市内各所で開催した。	・ 市民に孤独・孤立という社会課題に関心をもってもらうこと ・ 当事者の方に、孤独・孤立を抱えているのは「自分だけではない」と感じてもらうこと	10 月～11 月	パネル展示作成(約 10 万円)
			成果 検証 結果 ✓ パネル展の満足度として、「大変良い」「良い」を選んだ人が 90%以上。 ✓ パネル展に来場した前後で「人と人とのつながり」への意識が「変わった」と答えた人が 60%以上。		

7. 次年度以降に向けた事業等の案 ※PDCA サイクルに照らして次年度以降に取り組んでいく事業イメージ(あれば)を列举

- ・ 重層的支援体制整備事業の地域づくり, 参加支援事業を利用して, PFの活性化を図り, PFに参加する機関・団体の増加を図る。

8. 孤独・孤立対策を公表した際の反響

- ・ 「孤独・孤立」という社会課題解決の重要性は認識されつつあるものの、庁内関係部署含め、支援機関等の積極的な関与までは至らなかった。

4. 連携 PF の行程および実務上の留意点

【PF 立ち上げまでの行程】 ※令和6年度から孤独・孤立対策を実施

R6 年度	(ア)初期段階	
4月 ～	主担当部署の 設定	■ひきこもりやヤングケアラーの調査経験がある重層的支援室が担当
4月 ～	担当者の初動	■地域特性が読めない地域には、参加者を運営側が指定しない自由参加型での PF の形も検討
	(イ)準備段階	
4月 ～	連携 PF の 企画・設計	■既存事業や過去の経験をベースに対象者像を描いて PF の設計を行った
10月 ～	地域の現状把握	■孤独・孤立についての調査や、試行的事業のテーマに関わる実態調査行う
10月 ～	関係団体の リストアップ(庁内)	■庁内関係部署に「孤独・孤立」という社会課題やその取組内容について周知することを心掛けた
10月 ～	関係団体の リストアップ(庁外)	■既存の連携団体へのコンタクトや関係部署からの紹介を基にしたつながりづくりからスタートした
11月 ～12 月	取組テーマ決定	■試行的事業のメニューを先に決め、後から PF のテーマを議論するという順序で行った
	(ウ)設立段階	
10月 ～	域内住民・団体への 情報発信	■地域住民の経験談や当事者の声をベースに普及・啓発活動を実施した
今後	連携 PF の 運営	■2層構成の PF を運営しながら、支援団体同士のつながりを促進する
	(エ)自走段階	
今後	地域協議会の 設置	■PF メンバー、庁内関係部署との関係を整理しながら検討を進める
今後	PF の 拡大・活性化	■スポーツ、教育など福祉以外のテーマを取り入れた PF 構築・拡大を目指す

【それぞれの段階での留意】

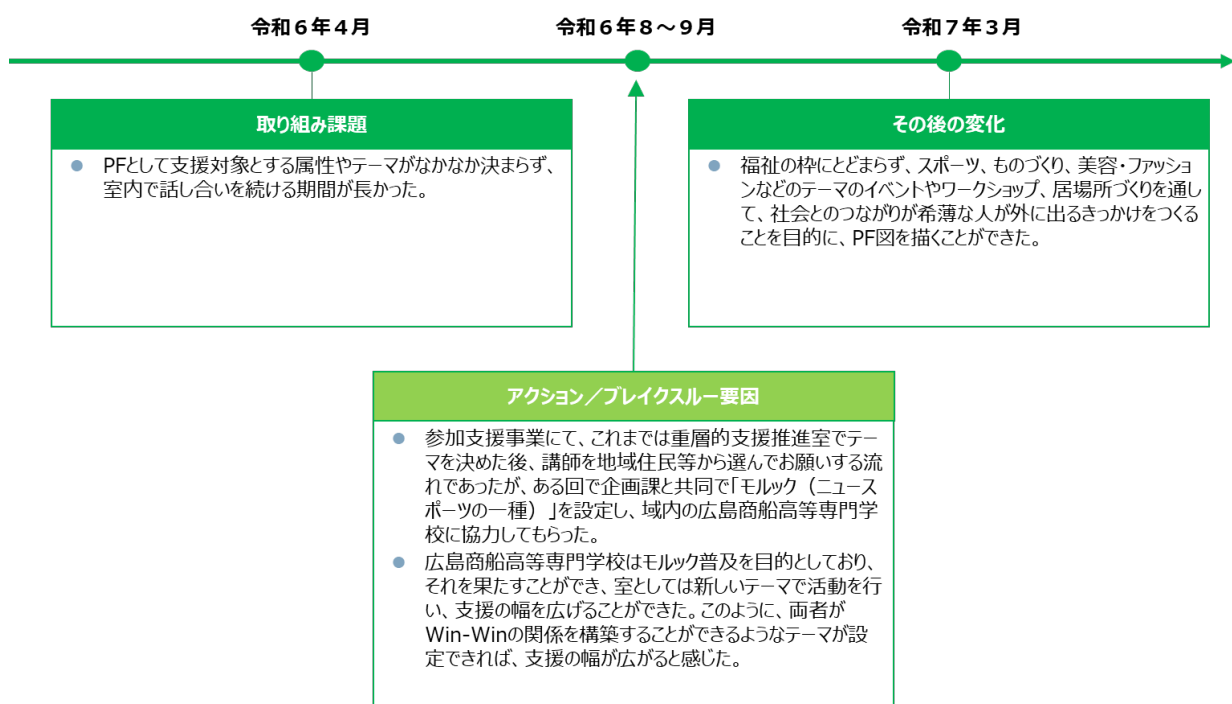
(ア)初期段階		
①	主担当部署の設定	■ひきこもりやヤングケアラーの調査経験がある重層的支援推進室が担当 - 令和4年度にひきこもり調査や令和5年度にケアラー実態把握調査を設計した、重層的支援推進室が主担当。 - 両調査の共通点として「孤独・孤立」を社会課題として抱えていることを実感し、申請に至った。
②	担当者の初動	■事前準備をしていたこともあり、実態調査やイベントの企画について、採択後早い段階から動き出すことができた - 本事業の採択結果に関わらず、実態調査は行う予定であったため、仕様書なども作成済みであった。講演会についても予め計画していたため、迅速に試行的事業の履行に移ることができた。 - 上記以外の試行的事業として、採択後に室内で協議の上、パネル展の開催を決めた。

(イ)準備段階		
③	地域の現状把握	■孤独・孤立についての調査や、試行的事業のテーマに関わる実態調査を行う 実態調査を企画・実施。サンプルの数を多くして、孤独を感じている人のN数を十分にとった上で分析したく、3,000名への実施決定。前々から準備していたため、初動が早く、10月中に実施することができた。呉市独自設問として、「居場所」に関する設問を設計。
④-1	取組テーマ決定	■試行的事業のメニューを先に決め、後からPFのテーマを議論するという順序で行った - 孤独・孤立自体が新しく取り組むテーマであるため、まずは実態としてのデータを把握し、その上で政策を考えたく、実態調査を行うことは最初に決まった。 - 過去にケアラーの支援講演会を行った経験から、今年度も講演会は実施したいという想いがあった。
④-2	連携PFの企画・設計	■既存事業や過去の経験をベースに対象者像を描いてPFの設計を行った - 対象者やテーマについて、庁内部署との調整も試みたが、孤独・孤立PFの出口を何にするか(例:就労支援など)が難しく、時間をかけて協議した。 - 結果、参加支援事業をベースに、ひきこもりやケアラーの支援の経験から、「社会とのつながりが希薄な人」を対象とする方向性で合意形成ができた。
⑤	関係団体のリストアップ 初期メンバーへの声掛け	■庁内関係部署に「孤独・孤立」という社会課題やその取組内容について周知することを心掛けた 本事業における呉市の取組について、内部会議や代表者会議にて発表して、普及啓発を図り、連携可能性を模索した。
		■既存の連携団体へのコンタクトや関係部署からの紹介を基にしたつながりづくりからスタートした - 既に連携している団体が多いため、リストアップ自体は難しくなく、協力してもらえそうな感触もあった。連携については、各団体が負担感を感じない説明の仕方が重要だと考えた。 - 関連部署にも有望な団体を紹介いただき、アプローチを実施した。

(ウ)設立段階		
⑥	域内住民・団体への情報発信	■地域住民の経験談や当事者の声をベースに普及・啓発活動を実施した - 講演会では、地域で孤独・孤立に関連があり、かつ集客が期待できる有識者を登壇者として招聘した。 - 当事者の声を広く届けるべく、ケアラーやひきこもりの家族、LGBTQの方にインタビューし、それをまとめたエッセイを展示するパネル展を企画した。
⑦	連携PFの運営	■2層構成のPFを運営しながら、支援団体同士のつながりを促進する - 核となる団体と、ゆるく連携する団体の2層構成を予定している。 - 利用者が固定されている、支援メニューが限定されている、という支援団体同士の課題を、支援団体同士が連携することで解決するようなPFをしたい。

(工)自走段階		
⑧	地域協議会の設置	■PF メンバー、庁内関係部署との関係を整理しながら検討を進める PF を構築した上で、活動の核となる団体で地域協議会を構成したいと考えている。
⑨	PF の拡大・活性化	■スポーツ、教育など福祉以外のテーマを取り入れた PF 構築・拡大を目指す - 広報活動にも注力して拡大していきたい。具体的には、スポーツ関連の団体、教育機関などとの参加支援事業での連携を実績として、福祉以外をテーマとして活動する団体も加入したくなるような PF にしていきたい。 - 将来的には、個人で活動しているような方も含めたい。

ブレイクスルー要因		
	アクション/ ブレイクスルー要因	■参加支援事業を他部署と連携しながら、個人ではなく団体とイベント等を企画したこと - PF の支援対象やテーマについて、室内の意見を集約することに時間を要したが、参加支援事業にて、域内の商船高等専門学校とスポーツに取り組んだことで、テーマ設定における思考の幅が広がった。 - これまでは重層的支援推進室でテーマを決めた後、講師を地域住民等から選んでお願いする流れであったが、今回はじめて域内の団体と一緒にイベントを企画したことによって、協力を仰ぐだけでなくお互いにメリットを享受しながら活動するという官民連携のモデルを検討することができた。 - このように、両者が Win-Win の関係を構築することができるようなテーマが設定できれば、支援の幅が広がると感じ、それ以降福祉の枠に留まらないテーマの参加支援事業の企画や PF 構築を検討し始めた。



コラム ～地域の支援団体から見た孤独・孤立対策と連携 PF の重要性～

ダブルケアひろしま

- ・ ご自身のダブルケアの経験を通じ、ダブルケアの当事者は、その悩みや状況について気軽に話すことができる場所がないという問題意識から、令和3年12月に「ダブルケアひろしま」を立ち上げる。月に1回程度、ダブルケアカフェを市内で開催し、ダブルケアラーの居場所づくりを行っている。また、令和6年から年に1回の頻度で呉市重層的支援推進室と共に、ダブルケアパネル展を開催している。
- ・ ダブルケアカフェの参加者は40～50代の女性が多く、毎回6～7人程度集まって、2時間～2時間半程度、自分たちの話をしあう。「行政に相談することはハードルが高いが、カフェであれば参加しやすい」との声をいただいている。相談内容によっては、重層的支援推進室、地域包括支援センターや支援機関につなげることもある。
- ・ 現在、市内の貸しスペースを活用してダブルケアカフェを開催しているが、ゆくゆくは常設の場所でのダブルケアカフェの開催や、女性の参加者のみならず「男性介護」をテーマとした集まりの企画も検討したい。

💡 個人情報保護の観点や新型コロナウイルス流行の影響から、地域での関係性が希薄化する中で「障害者には相談支援専門員、高齢者にはケアマネジャーがつくが、ケアラー自身の話を聞く人がいない」ことに気づき、ケアラーの居場所づくりを実施

- ・ 呉市内でも、「近所の人顔がわからない」という地域住民が多く、自治会や子ども会も昔のように機能していない。個人情報保護の観点から、独居高齢者やひきこもりの方、ケアラーについても、その所在が知られにくいことが課題だと認識している。ケアする側が倒れるとその家庭は崩壊に向かうため、その一歩手前の時点で、ケアラーが考えや悩みをさらけ出す場所が必要だった。

💡 PFへの期待は、「福祉」を押し出さず、支援団体同士、地域住民同士のフラットな関係性の構築

- ・ 「福祉」というカテゴリに棲み分けられると、別物扱いされているような感覚に陥る。孤独・孤立官民連携PFでは、参画する支援団体同士がフラットな状態でそれぞれの活動を共有できることが理想である。

ダブルケアパネル展の様子



ケアのある暮らしについてもっと「知る」ことで、お互いに不安や負担を軽減できると思います。

ケアラー自身が感じている負担感は抱え込みがちで、外とつながりにくい。

「相談」と構えず気軽に何でも話せる場、ケアの話題を共有できる場を、行政やさまざまな団体とつながりながら充実させていきたいです。ケアがあっても大丈夫！といえる地域社会になるための活動を続けます。

ダブルケアひろしま 代表
大谷 佳代様

5.自治体等との打合せ記録一覧				
No.	日時	打合せ相手団体	出席者	
			打合せ相手	NRI
1	7/31(水) 10:30-12:00	呉市 福祉保健課 重層的支援推進室	重層的支援推進室 社会福祉協議会	生駒、谷本、坂田
2	8/27(火) 15:00-16:30	呉市 福祉保健課 重層的支援推進室	重層的支援推進室 社会福祉協議会	生駒、坂田
3	9/27(金) 12:00-13:00	呉市 福祉保健課 重層的支援推進室	重層的支援推進室 社会福祉協議会	生駒、坂田
4	10/10(木) 13:30-14:30	呉市 福祉保健課 重層的支援推進室	重層的支援推進室 社会福祉協議会	坂田
5	1/14(火) 15:00-16:30	呉市 福祉保健課 重層的支援推進室	重層的支援推進室 社会福祉協議会	坂田
6	3/11(火) 13:00-14:00	呉市 福祉保健課 重層的支援推進室	重層的支援推進室 社会福祉協議会	生駒、坂田

6. 自治体による従前からの取組

令和 4 年度から重層的支援推進室を設置し、重層的支援体制整備事業として、属性を問わない相談支援、参加支援、地域づくりを実施。その中で、世代・分野を超えて各事業で協働できそうなこと、また、共通の課題等について、庁内福祉関係各課と呉市社会福祉協議会で、ワーキングを行った。

■ ひきこもりに関するアンケート調査(令和 4 年度実施)

(取組概要)

呉市におけるひきこもり状態にある人の実態を調査し、地域における実態を把握するため、市内の民生・児童委員 619 人に調査票を配布し、527 人から回答を得た。

その結果、民生・児童委員は、ひきこもり状態にある人を、直接家族等に相談されて把握しているというよりも、地域活動等により把握しているということがわかった。また、「把握しても、本人や家族から関与を拒否される。」などの意見もあり、ひきこもりの本人、家族については、周囲に知られたくない、自己責任であり支援は求められないとの思いなどから、相談することに抵抗があり、社会的孤立が進んでいるのではないかと推測された。

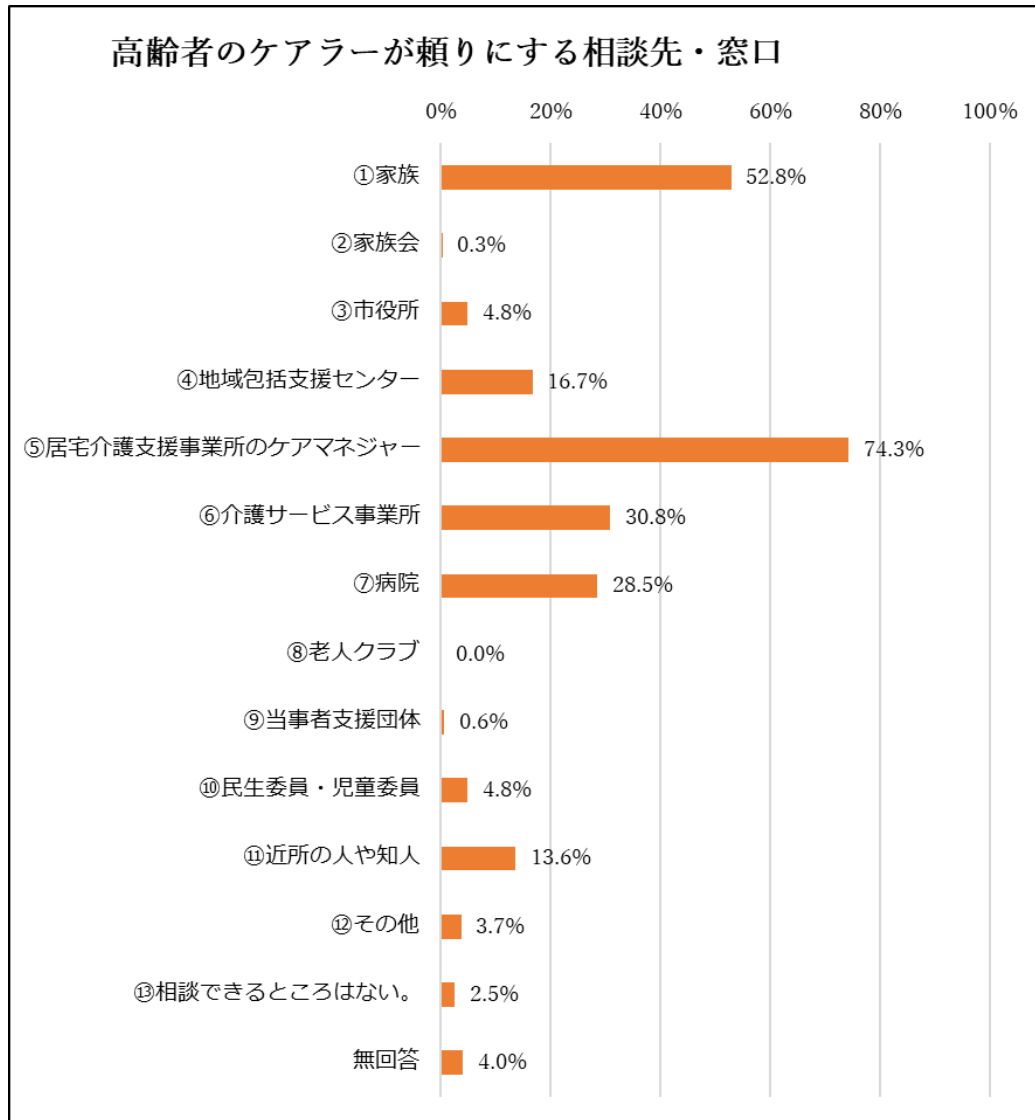
■ ケアラー実態把握調査(令和 5 年度実施)

(取組概要)

呉市でケアが必要な方とケアラーを支えるための取組を進める上で、ケアラーの生活実態や困っていることを把握するため、高齢者、障害児・者等の介護・お世話・支援を行っている呉市民約1500名に調査票を配布し、562件の回答を得た。

その結果、ケアラーは自分自身のことを「ケアラー(要介護者等と同等の支援の対象者としての家族介護者)」と認識することなく、日々のケアや日常に追われ、自分の人生の充実よりも、多岐にわたるケアに悩み、不安を抱えている現状が判明した。

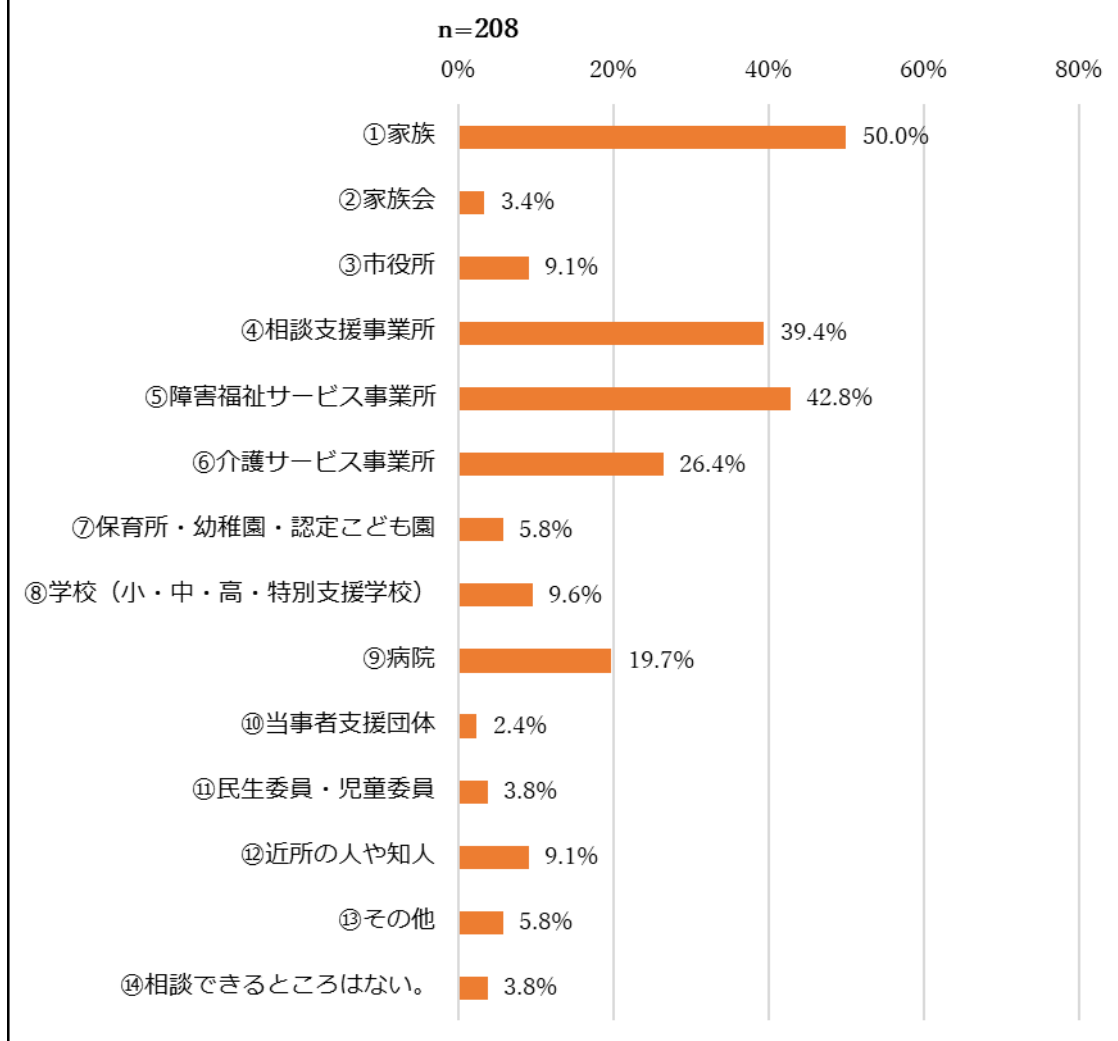
図表 ケアラーが頼りにする相談先・窓口



高齢者のケアラーが頼りにしている相談先・窓口は、「ケアマネジャー」(74.3%)が最も多く、次いで「家族」(52.8%)、「介護サービス事業所」(30.8%)、「病院」(28.5%)の順となり、介護と医療の専門機関が挙げられていた。

一方で、「相談できるところはない」は 2.5%となった。「その他」では、インターネットなどの回答があった。

障害児・者のケアラーが頼りにする相談先・窓口



ケアラーが頼りにしている相談先・窓口は、「家族」(50.0%)が最も多く、次いで「障害福祉サービス事業所」(42.8%),「相談支援事業所」(39.4%),「介護サービス事業所」(26.4%)の順となった。

一方で、「相談できるところはない」は 3.8%となった。

7. 試行的事業

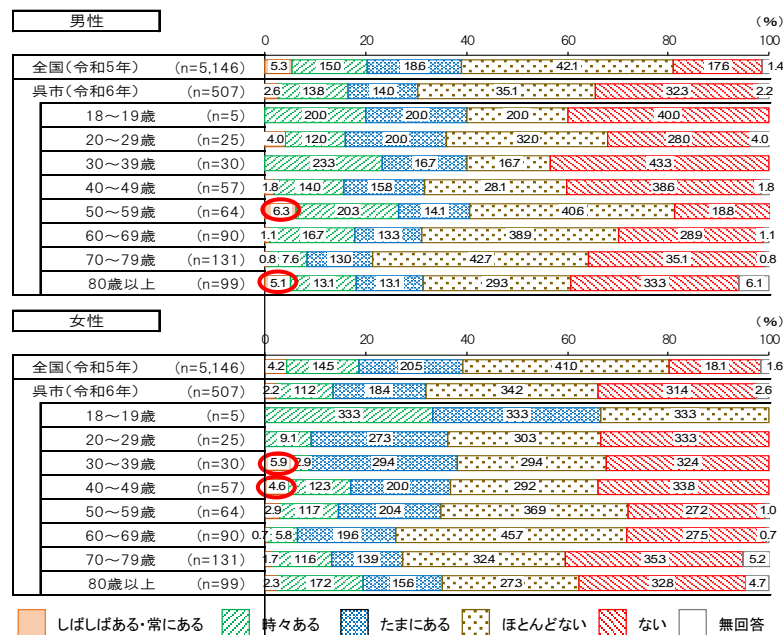
① 実態調査

概要	- 調査対象者:18 歳以上の市民から無作為抽出した 3,000 人 - 調査方法:郵送により調査票を送付, 郵送またはインターネット回答による回収 - 調査期間:令和 6 年 9 月 27 日(金)~令和 6 年 10 月 31 日(木) - 設問数:孤独や孤立に関する事項, 年齢, 性別等の属性事項等 28 問
ねらい	呉市における孤独・孤立の実態を把握し, これに関連する施策を実施している関係課において, 対策を検討する上での基礎資料を得ること
工夫点	- 回答者が郵送・インターネット双方の回収を選択できるようにし, 回収率アップを試みた。 - 呉市独自の設問として, 居場所に関する設問(「あなたの居場所はどこですか。」「どのような居場所があったらよいと考えますか。」等)を設計し, 孤独の感じ方等とのクロス分析を行った。
結果	- 有効回収数 1,198 件(有効回答率 39.9%) - 呉市では, 若者と比較して中高年の孤独感が高く表れている。 - 安心できる居場所が「ない」と回答した人ほど, 孤独感を感じやすく, また孤立する傾向も高い。

(年代別孤独・孤立の実態)

- 孤独感が「しばしばある・常にある」と回答した人の割合は, 男女・年齢階級別にみると, 男性では 50 歳代及び 80 歳以上, 女性では 30 歳代及び 40 歳代で高い。

図表 年齢階級別孤独感



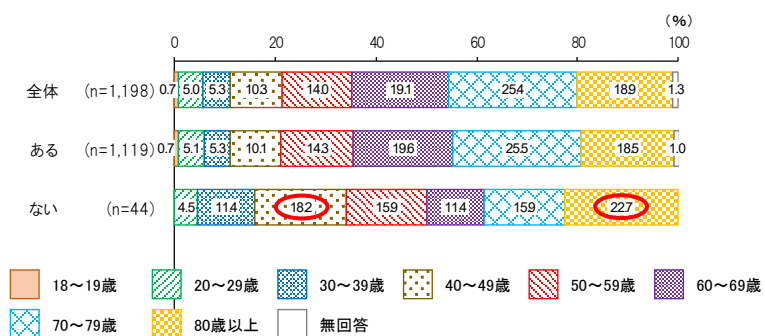
(呉市独自設問:安心できる居場所の有無別孤独感と孤立の傾向)

- 安心できる居場所が「ない」と回答した人は孤独感・孤立の傾向が高い傾向にある。
- 安心できる居場所が「ない」と回答した人の割合は, 40 歳代及び 80 歳以上において高い。

図表 安心できる居場所の有無別孤独感と孤立の傾向

設問	回答	n(人)	孤独感 「しばしばある・常にある」		孤立の傾向あり	
			度数 (人)	割合 (%)	度数 (人)	割合 (%)
あなたにとって、安心できる居場所がありますか。	ある	1,119	19	1.7	30	2.7
	ない	44	10	<u>22.7</u>	20	<u>45.5</u>

図表 安心できる居場所の有無別年齢階級



② 講演会	
概要	- 孤独・孤立問題の市民への普及啓発・支援の機運醸成を目的として、絵本の朗読、パネルディスカッションで構成する講演会を令和6年10月20日(日)に開催した。 - パネルディスカッションには、内閣府大西参与、臨床心理士、地域のコミュニティ形成に関する実践者、地元の大学生が登壇した。
ねらい	市民に孤独・孤立という社会課題に関心をもってもらうこと
工夫点	2部構成とし、第1部で絵本の読み聞かせを用いて人と人とのつながりについて課題提起することで、幅広い年代の関心を集めるよう工夫した。その上で第2部では、地域で活動する方に登壇を依頼し、自らの経験に基づいてお話いただくことで、来場者に孤独・孤立という社会課題を自分事として感じてもらえるよう設計した。
結果	- 参加者100名 - アンケート結果より、講演会の満足度として、「大変良い」「良い」を選んだ人が85%以上を占めた。講演会に参加する前後で「人と人とのつながりへの意識が「変わった」と答えた人が60%以上を占めた。

(広報の工夫)

- 市役所本庁舎及び各市民センター、子育て支援センター(2箇所)、社会福祉協議会各支所、児童館(3箇所)に、ポスターの掲示とチラシの配架を依頼した。
- アンケート結果より、「チラシ」で本イベントを知った方が最も多く4割を占めた。

図表 講演会 ポスター

令和6年度
孤独・孤立対策事業

つながる講演会

～つながりが明日のチカラになる～

孤独・孤立は人生の中で誰にでも起こりうるものです。
あなたの家族や周りの人も、もしかしたら、今、悩みを一人で抱えているかもしれません。
ひとりで不安を抱えている人に寄り添い、手を差し伸べられる社会を目指して。
人と、社会と「つながる」後押しとなることを願って、講演会を開催します。
ぜひご参加ください。

参加費無料／要事前申込み(300名)／手話通訳あり

光の妖精「ヒカリノ」

日時 令和6年10月20日(日) 14時00分～15時30分
(開場13時30分)

場所 広まちづくりセンター 3階ホール
(呉市広古新聞2丁目1番3号 広市民センター)
※公共交通機関をご利用ください。市民センター駐車場を利用された場合、無料利用はできませんので、ご了承ください。

内容 第1部(14時05分～14時25分)：絵本からみえる人と人とのつながり『ともだち』 谷川 俊太郎・文／和田 誠・絵 玉川大学出版部
第2部(14時25分～15時30分)：パネルディスカッション『つながりが明日のチカラになる』

申込み 9月20日(金)～10月15日(火)17時までに申込みフォームからお申込みください。
当日、お席に余裕がある場合は、事前申込みがなくても、ご参加可能です。
(申込み外部リンク)
<https://l3c35ab61.form.kintoneapp.com/public/000009d9b48ee882ff2b>

【お問い合わせ先】
呉市福祉保健部重層的支援推進室
〒737-8501 呉市中央4丁目1番6号 呉市役所本庁舎2階
TEL: 0823-25-5715 E-mail: zyusou@city.kure.lg.jp

登壇者紹介

第1部
14:05～14:25

岩竹 香織さん インタビュー・ライター
放送局、図書館、設計事務所勤務を経て「聞く」仕事へ。言葉を通して相手の手、言葉にならない心を感じながら日々対話を重ねている。

第2部
14:25～15:30

大西 連さん 内閣府孤独・孤立対策推進室 孤独・孤立対策推進参事
認定NPO法人自立生活サポートセンター・もやい理事長、新宿ごはんプラス共同代表。20代前半よりホームレス状態の方、生活困難な方への相談支援に関わる。生活保護や社会保障削減などの問題について、現場からの声の発信や政策提言を行うとともに、令和3年6月に内閣府孤独・孤立対策推進室政策参事に就任し、政府の孤独・孤立対策の政策立案に携わる。令和6年4月から現職。

神崎 洸一さん 医療法人正徳会呉みどりクリニック病院こどもとそだち支援室 臨床心理士・公認心理師
NPO法人の代表、浅田病院勤務を経て、現在は呉みどりクリニックに勤務し、児童精神科外来・成人発達外来に携わる。特に不登校や自傷、市販薬依存など、子どもや若者の行動問題に対する支援に力を注ぐ。訳書に『自閉症スペクトラム障害とアルコール依存の地獄から回復まで』(分館翻訳、マッシュルーム・ティンズリー、サラ・ヘンドリックス著、明石書店、2022)がある。

佐々木 サラさん 雑貨とカフェバー「スキナダケ」店主
広島県立広島高等学校卒業、広島大学在学中に、まちづくりとプロジェクトマネジメントについて学び、地域のコミュニティづくりに関して実践・研究してきた。授業の一環でアメリカ・ボールドを訪問したこと、よりまちづくりに興味を持ち、卒業後は、「地方創生」を理念に掲げる企業に就職。会社員をする一方で「スキナダケ」という雑貨を販売する。現在は、会社を退職し、店舗経営に専念中。

古森 ふきさん 県立広島大学地域創生学部地域創生学科 地域産業コース4年
県立広島高等学校卒業。大学でマーケティングを学ぶゼミに所属し、呉市通商商店街で実習した魅力的な人やお店をSNS(YouTube担当)で発信し、商店街の活性化に貢献。活動の様子は、RCCテレビ「イマナマ!」で取り上げられた。授業の一環で、竹原市田万重町の活性化をテーマに制作した短編ドキュメンタリー映画は、第11回新県展(第75回広島美術展)映像系部門で奨励賞を受賞。

(アンケート結果(自由記述抜粋))

- 人と人とのつながり方は千差万別で、何ら無理強いや強制されるものではないが、地域や接する相手が何に価値を持ち、どういうつながりを求めているかをよく考えたり、気づいたりできたらいいと思う。
- つながりは選択自由。つながらないのも大事な選択なんだなぁと思いました。私は、どちらかという
と、つながって欲しいと思って、そういう場を作っていきたいと思っています。まずは、行動することだ
なと感じました。
- 人によってつながり方は違う。それを自分で選べる自分になりたい。人のことを気にする自分だけど、
自分にとって何がいいのか、心が落ち着くのか、自分を見つめる人でありたいと思った。また、仕事柄、
子育て支援の子ども、親にも、それぞれ選ぶ道ができるよう、営業で伝えられたらいい。

図表左 第1部「絵本からみえる人と人とのつながり」

図表右 第2部パネルディスカッション「つながりが明日のチカラになる」



③ パネル展	
概要	ケアラーやひきこもりの家族、LGBTQ の方に孤独を感じた体験や「つながること」についてインタビューし、それをまとめたエッセイを展示するパネル展を市内各所で令和6年10月下旬～11月下旬にかけて開催した。
ねらい	市民や支援機関に対して、「孤独・孤立」は誰でも起こりえる問題であることの周知を図り、孤独・孤立に悩む人が状況に応じ、相談や支援を受けることができる「相互に支えあい、人と人との「つながり」が生まれる社会」の実現を目指す。
工夫点	介護支援専門員連絡協議会にケアマネへの広報を依頼し、障害分野については、地域生活支援拠点会議にて広報を行った。その他、民生委員児童委員協議会会長会議にて広報し、地区の協議会にて広報及びチラシの配布を依頼した。また、孤独・孤立調査の際にチラシを同封する等、広報に力を入れた。
結果	アンケート結果より、パネル展の満足度として、「大変良い」「良い」を選んだ人が90%以上を占めた。パネル展に来場する前後で「人と人とのつながり」への意識が「変わった」と答えた人が60%以上を占めた。

(開催日時・場所)

以下の日程、場所で開催した。

- 10月17日(木)～10月22日(火) 広市民センター
- 10月23日(水)～10月29日(火) 安浦まちづくりセンター
- 10月30日(水)～11月5日(火) 昭和まちづくりセンター
- 11月21日(木)～11月24日(日) 市役所本庁

図表左 パネル展ポスター

図表右 パネル展の様子



(アンケート結果(自由記述抜粋))

- 人とつながる大切さを改めて感じました。1人でも多くの人が一じゃないと思える社会になってほしいです。
- 自分と夫とのこと, 息子のことで悩んでおり, 孤独を感じることもあり誰かに相談できたらなと思っていたところ, このパネル展に出会いました。
- 小さいことでも本人にとってはすごく大きな意味があるなと思った。気が付けるように周囲にアンテナを張って過ごしていこうと思います。
- 周りにつながるところがあることを知り, 助けてと言えるところ, 共感してもらえるところがあるのを知って力をもらい頑張れると思った。